

構文の基本形と変種¹

文法事項の配列順序への示唆

大 室 剛 志*

Basic Forms and Their Variants in Constructions:

A Suggestion on the Ordering of Grammatical Items

OMURO Takeshi*

Abstract

There has been a certain gap between English linguistics and English education; on the one hand, English linguists, in particular those who are interested in linguistic theory, have been very busy catching up with, understanding, and making a contribution to the development of linguistic theory, so that they have no time to apply the achievements of English linguistics to English education, and, on the other hand, English educationalists and English teachers refrain from studying overly abstract linguistic theory and make no attempt to apply the achievements of English linguistics to English education. However, it would be ideal for the 'theoretical' English linguists if their work for the primary purpose of linguistic theory led to direct contributions to English education.

In this paper, I will show along the general line of discussion in Kajita (1982-4), through the particular analyses of a certain kind of parenthetical clauses, cognate object constructions, gesture-expression constructions and *one's way*-constructions, that research for the primary purpose of linguistic theory - that is, to define the notion of the class of 'possible grammars' as narrowly as possible - will make a direct contribution to the important ordering principle of grammatical items, that is, that they should be ordered from simple to complex: this will provide a certain scientific objectivity to the notions 'simple' and 'complex' involved in that principle.

1. はじめに

英語学は、英語に関する新しい言語事実の発掘とそれに対する記述、説明を施すことによって、英語教育の基盤である英文法教育に貢献できるはずである。しかしながら、現実には、英語学者（特に言語理論志向型の英語学者）の殆どは、いずれかの言

語理論の進展を追いかけ、理解し、それに貢献しようとする中で忙しく、そこでの研究成果を英語教育に生かすことを考える余裕などない。また、英語教育の専門家や現場の教師には、ますます抽象化に拍車がかかる言語理論は、それこそ専門的すぎて近寄り難く、そこで得られる研究成果について、それを英語教育に生かそうなどとは

* 国際開発研究科国際コミュニケーション専攻教授

しないであろう。

このような英語学と英語教育の乖離状態にあって、言語理論の第一義的な課題を追求しつつ、それが少なからず直接的な形で英文法教育の貢献につながるような可能性がもしあれば、それは言語理論志向型の英語学者にとって理想的と言える。

本稿では、「可能な文法」の類を狭く絞り込むという言語理論の第一義的な課題を追求することが、「基本的な事項から高度な事項へ」という文法事項の配列順序の決定にあずかる重要な原則に対して、それに客観性を与えるという形で貢献できる可能性があることを、梶田(1982:4)においてなされた議論に則しながら、具体的に、ある種の挿入節、同族目的語構文、動作表現構文、One's Way構文を取り上げ、これらの構文分析を通じて示唆したい。

2. 構文の基本形と変種

2.1. ある種の挿入節

具体的な話から始めることにする。(1)を見てみる。

(1) Nobody knows, the fact is.
(Bolinger (1972:67))

この文を見た時、奇妙な文だと感じる。それに対して、(2)を見ても、特に奇妙だとは感じない。

(2) The fact is that nobody knows.

この差はどこから生じるのか。いろいろな可能性が考えられるが、動的文法理論の下での一つの分析では、(1)と(2)の生成に関わっている規則自体の資格の差による

と考える。即ち、言語知識自体によると考える。(2)は多義で、一つは、「事実は誰も知らないということです。」と解釈され、もう一つは、The fact isの部分をモダリティととって「実は、誰も知らないのです。」と解釈される。後者の解釈では、いわば、形と意味のミスマッチが起き、形の上では従属節であるnobody knowsが意味的には主節であるように解釈されている。一方で、(3)のような、今述べた後者の解釈に形の上でも合致した文がある。

(3) In fact, nobody knows.

それならば、(3)をいわば手本にして、(2)の後者の解釈で生じてしまった形と意味のミスマッチを取り除くように、(2)の形を(3)のように組み換えてしまうような新しい種類の規則が可能になるのではないかと考えられる。そして、実際、その新種の規則によって、本来(4)の構造をしていた(2)が、(3)の構造に合わせて、(5)のように組み換えられる。

(4) [_s The fact is that [_s nobody knows.]]

(5) [_{sAdv} The fact is that][_s nobody knows.]

(5)のような構造の組み替えが実際に起きると、その後の自然な文法展開としては、nobody knowsが主節となったのだから、従属節を導くためのthatはその機能を失い、必要なくなり、消されることになる。

(6) The fact is, nobody knows.
(Bolinger (1972:67))

更に、修飾要素に格下げされたthe fact isは、そのことをより明白に示すような位置、即ち、文中、文末などに移されるようになる。

(7) Nobody, the fact is, knows.

(8) Nobody knows, the fact is.

この(8)こそが、最初に見た(1)の文である。更に、the fact is thatはSAdvに組み換えられたので、一端、SAdvとしての資格が確立すれば、もう今述べた組み換えを飛ばして(bypass)して、本来のSAdvが生起できる位置へと、自前の構造として、その生起する位置を一般化していく。例えば、焦点化されている動詞句内の要素である前置詞句の前にSAdvが生起可能であるため、問題の要素も同じ位置に生起可能となると考えられる。それが(9)の例である。(10)はthe implication isであるがほぼ同趣旨の実例である。(10)ではenough toの間に、the implication isが生起している。

(9) That chapter was basically written in the late 1950s, the fact is, in 1958-1959, around then.

(Cf. That chapter was basically written in the late 1950s, in fact, in 1958-1959, around then. (Noam Chomsky, *The Generative Enterprise*, Foris, p.62))

(10) 'Well, I was driving up to the house at about the right time, it seems. And they've been checking up on things, and it seems that I took too much time between the lodge and

the house - time enough, the implication is, to leave the car, run round the house, go in through the side door, shoot Christian and rush out and back to the car again.'

(Agatha Christie, *They Do It With Mirrors*, Fontana, pp.113-114)

更に、the fact is thatはSAdvに組み換えられたのだから、元来のSAdvが持つ性質を帯びるようになる。SAdvは、monomorphemeが無標なので、その性質に近寄るためtheが落ち始める。

(11) a. Fact is, Hastings, I'm cut out now for a bachelor existence.

(Agatha Christie, *Curtain*, Pocket Books, p.83)

b. Fact is, it must have been done!

(Agatha Christie, *And Then There Were None*, Fontana, p.80)

c. Fact is, we've been getting complaints.

(Arthur Hailey, *Hotel*, Pan Books, p.205)

これまでのところを、(1)に対して奇妙と感じるのに(2)に対してそう感じないのは何故か、という観点から理論的に整理しておく。動的文法理論では、英文法のある途中の習得段階を仮定し、それまでに習得済みの基本的な規則群によって、基本的な文である(2)と(3)が生成されると考える。そのうちの(2)の文が、形と意味のミスマッチの状態を作り出した時、初

めて、次の段階で(4)の構造を(3)をモデルとして(5)に組み換えて、このミスマッチを除去する新種の規則が英文法に導入されると考える。したがって、(2)は、(3)と同様、基本的な規則によって生成されるので、別段、奇妙な文と感じないのに対し、(1)の文の生成には、この新種の規則が関わり、更に、その後の展開で、thatを消す操作、格下げされた要素を、そのことを明白に示す位置に移動する操作まで関わっている、奇妙な文と感ずることになる。

文法事項の配列順序に関して言えば、以上の分析の帰結として、(2)や(3)や(4)の構造という基本的なものを先に、次に組み換えがなされた(5)、その次に(6)、その後の展開である(1)や、(7)から(11)はそれらの後に順序付けしておけばよい。

NP is that SというTopic-Commentを示す構文のうち、形と意味のミスマッチを起こしたもののだけが、変種としてある種の挿入節へと拡張していき、その後、自前の構造として、分布を拡張させていくことを見た。このことは、構文の背後に、構文の基本形のあるものから変種を次々に生み出して行くような法則が潜んでいることを意味する。しかも、その法則は、言語習得のある段階のある文法がある規則群を含んでいて、その規則群のあるものが、ある一定の条件を満足したならば、その次の習得段階で、ある一定の別の種類の規則群が可能になると言う形で述べることができる。このような法則は、結局のところ、ある文法のある段階でどのような種類の規則が既に習得されている時に、初めてその文法の次の習得段

階でどのような規則が習得可能になりうるのかの規定をしていることになる。

以下の3つの節では、「何が既に可能な時に、何が次に可能になりうるのか」という発想の下、動詞の補部の拡張が関わる3つの構文、同族目的語構文、動作表現構文、One's Way構文について更に論じて行くことにする。

2.2. 同族目的語構文

(12)を見てみる。

(12) She smiled a warm happy smile.

(12)も考えてみれば、奇妙な構文である。自動詞のはずのsmileが目的語をとっている。しかも、その目的語が動詞と同じsmileという形である。何故、このような構文がそもそも英語では可能なのか。(12)は奇妙だが、(13)と(14)は奇妙ではない。

(13) She smiled happily.

(14) She gave a warm happy smile.

(13)の様態副詞に着目すると、岡田(1985:132)等が指摘するように、様態副詞は、別の様態副詞によって修飾されない。

(15) *She smiled warmly happily.

英文法の体系上にある種の空隙部分が存在していると言える。一方、(14)の目的語名詞句は名詞句ゆえに豊富な修飾構造を持つ((14)と(15)の文法性の対比に注目)。しかし、目的語なので様態付加詞としては機能しない。そうすると、この両者の空隙の

部分を埋める力が文法に加わる。豊富な修飾構造を実現するために仮の名詞を仕立てあげる。同時に、なるべく様態のところが際立つ名詞がよい、となると動詞smileでsmileの意味は既に表しているので、動詞と同じ形態のsmileを仕立てれば、そこは意味的に殆ど何も文に加えないことになり、名詞句内の修飾部が際立つので、smileが選ばれる。このような表現力を拡充する力が文法に働き生成されるのが、(12)である。

更に、Tenny (1987:153-4) は、(13)のように、smileのような非能格自動詞が目的語をとらずに使われ、しかも有界的な出来事を記述していると理解される時には、暗黙裡に再帰形目的語あるいは同族目的語が含意されていると言う。意味は有るが形が無いという一種の形と意味のミスマッチがここでも生じている。しかも、その暗黙裡に含意されたsmileは、手本となる(14)の構造にある。ならば、その暗黙裡のsmileを形の上で顕在化させる力が文法に加わる。

表現力拡充、顕在化など、文法の拡張を促す要因が重なって、問題の習得段階の次の習得段階で、導入されたのが、(12)の同族目的語構文である。こうして、自動詞smileはその目的語補部を拡張させたと考えられる。

(12)が可能となった後の文法の展開として何が起こるか。

(15)では、様態副詞が様態副詞を修飾することが出来ずに、複雑な様態を表しきれない。その空隙を埋める形で、同族目的語構文は可能になったのだから、同族目的語には豊富な修飾語が付く方が自然となる。そうすると、高見・久野(2002)が述べるように、同族目的語構文では、主動詞が表

す動作の様態よりも、同族名詞句全体が示唆する様態の方が意味的に狭くなっていなければならないことになる。次の文法の展開としては、この重要な制約を守る限りにおいて、名詞の形態が動詞の形態からずれても可能になるのではないかと考えられる。こうして可能となったのが、(16)のいわば特定の同族目的語構文である。

(16) Van Aldin laughed a quiet little cackle of amusement.

(Agatha Christie, *The Mystery of the Blue Train*, Fontana, p.19)

(Cf. He slept a fitful {sleep/slumber}. He smiled a knowing {smile/?smirk}. (Michael T. Wescoat (p.c.))(Horita (1996:225)))

同族目的語構文は、(15)のような自動詞構文では複雑な様態を表しきれず、いわば、その空隙を埋める形で可能となった。そうすると、同族目的語構文では、意味上最も重要なのは同族名詞句の中の修飾語句の部分となる。そして文の焦点もその箇所にあたる。しかも、同族目的語構文は自動詞構文を基にしているため、その動詞は、真性の他動詞が目的語を押さえつけるほどの統率力を目的語に対して持たない。そうすると、意味上重要で、焦点があたる同族名詞句の部分が、動詞からいわば意味上独立し、それに合うように、形の上でも動詞から切り離されていく。このような過程で可能になったのが(17)のカマを伴う、いわば同格的な同族目的語である。

(17) Mr. McDeere smiled, a rather nerv-

ous smile.

(John Grisham, *The Firm*, Arrow, p.389)

この方向での文法拡張が進んでいることを示すのが (18) である。

- (18) a. Tsu Ma smiled; a friend's strong smile. (BNC, GUG 2366)
 b. He smiled: a public, neutral smile. (BNC, G0Y 3397)

(18a) では、カマではなくて、セミコロンのが、(18b) では、さらに分節を強く示すコロンのが用いられている。

(16) (17) (18) 以外にも、同族目的語構文の変種メンバーと考えられるのが、(19) (20) (21) の例である。

- (19) They've walked the walk and talked the talk, and now they're picking pictures. (大名力氏の指摘、*TIME* CD-ROMより)

(Cf. In other words, modern linguistics talks the conventionalist talk, but walks the naturalist walk. (滝沢直宏氏指摘、Joseph, John E, *Limiting the Arbitrary: Linguistic Naturalism and its Opposites in Plato's Cratylus and Modern Theories of Language*. (*Studies in the History of the Language Sciences*), John Benjamins, p. 3)

(19) は、名古屋大学の同僚の滝沢直宏氏がCf. 以下の例を指摘したのに反応して、同

僚の大名力氏が指摘した例であるが、定冠詞のtheが起こり、修飾語句がなく、walk the walkとtalk the talkが対になって使われることが多い。かなりの変種だが、この例は同族目的語構文に基づいたイディオムとして捉えておくべきものである。

(20) は、Cf. 以下にある高見・久野(2002) が指摘した非対格動詞dropの例と同趣旨の例で、The Bank of Englishから採取した実例である。

- (20) I mean a lot of the statistics and things Michael Howard Yesterday in Parliament saying that crime in London has dropped erm the highest erm drop in twenty years I think it was that is purely because it was so high the previous year. (The Bank of English, brspok/UK. Text <ref id=SB 1 ----1640>)

(Cf. The stock market dropped its largest drop in three years today. (高見・久野 (2002:142))

(21a) (21b) も、高見・久野 (2002) が指摘しているある種の非常に限られた受身の例である。(21c) はWebからの実例である。

- (21) a. Pictures were taken, laughs were laughed, food was eaten.
 b. And the crowd responded with such outpourings of enthusiasm as I have never before witnessed. Screams were screamed, cheers cheered, sighs sighed, under-

wear thrown. (高見・久野
(2002:166))

- c. Hugs were hugged, smiles were
smiled, hands were shaken.
(<http://www.freelists.org/archives/7inch/022003/msg00000.html>)

修飾語句が無く、同族目的語の数が複数で、しかも、いずれの例も何かパーティの場面で使われており、場面的な制約を受けているようである。

同族目的語構文がそもそもどうして英語で可能となるのか、可能となった後でどのような拡張を更にとげるのかを見た。

文法事項の配列順序に関して言うと、(13) (14) が先で、(12) が次、その後、(16) (17) (18) (19) (20) (21) である。

2.3. 動作表現構文

(22) を見てみる。

(22) Miss Marple nodded agreement.
(Agatha Christie, *A Murder is Announced*, Fontana, p. 75)

(22) も奇妙である。何故(23) に示した自動詞のはずの nod が目的語を従えているのか。

(23) Miss Marple nodded.

では、どのようにして動詞 nod は、(22) のような補部の拡張を起こすのか。基本的な用法(23) について考えてみる。

(23) を習得した段階で、(24) の3つの

nod の意味を習得していると考えられる。

(24)

- a. $\left[\begin{array}{l} \text{MOVE}_{\text{Internal}}([\text{I}]_i \text{'s HEAD}) \\ \text{EVENT} [\text{MANNER UP \& DOWN}] \end{array} \right]$
- b. $\left[\begin{array}{l} \text{CAUSE}_{\text{Internal}}([\text{I}]_i, [\text{MOVE}_{\text{Internal}}([\text{I}]_i \text{'s HEAD}) \\ \text{EVENT} [\text{MANNER UP \& DOWN}]]]) \end{array} \right]$
- c. $\left[\begin{array}{l} \text{CAUSE}([\text{I}]_i, [\text{EVENT GO}([\text{I}]_i \text{'s AGREEMENT}, [\text{FROM}[\text{I}]_i \\ \text{PATH TO}[\text{I}]]])]) \\ \left[\begin{array}{l} \text{[BY} \\ \text{EVENT} \end{array} \left[\begin{array}{l} \text{CAUSE}_{\text{Internal}}([\text{I}]_i, [\text{MOVE}_{\text{Internal}}([\text{I}]_i \text{'s HEAD}) \\ \text{EVENT} [\text{MANNER UP \& DOWN}]]]) \end{array} \right] \right] \end{array} \right]$

(24a) から (24b) から (24c) への意味拡張は、Huddleston (1984:37) の意味での語用論的含意 (pragmatic implication) によってなされる。(24a) の「誰かの頭が上下に動く」のを見れば、殆どいつもといっていいほど、その人は生きていてしかも意思を持っている、という世の中の知識に訴えて、私達は、「その人が、その人の意思でもってその人の頭を上下させている」という(24b) の意味を推論する。更に、この(24b) の意味に基づいて、必要も無いのに人が意思をもって自分の頭を上下に動かすことは無い、という世の中の知識と、人が自分の意思で頭を上下に動かすのは、通常その人が自分の同意を相手に伝えるためにする行為である、という私達の社会・文化的な規約とに訴えて、「その人は自分の頭を上下に動かすことにより自分自身の同意を発しているのだ」という(24c) の意味を推論する。

(23) はこれらの3つのサブミーニングを持っている。

同族目的語構文の時にも触れたが、Tenny (1987: section 4.2.2) は、nod のような非能格動詞が形式上内項をとっていない時は、通

いう意味を典型的に具現するCSRは名詞句ではなくて、文であるので、(22)では、潜在的に命題としての解釈があるが、それがそのCSRで具現化されていない。そういう種類での形と意味のミスマッチが起きていることになる。そこで、習得の次の段階で、命題のCSRである文の形でagreementの部分を表し、このミスマッチを解消した形式が可能となる。それが(28)である。

(28) Miss Marple nodded that she agreed.

Rudanko (1984:153) は、(29)の見解をとり、(30)の非文法的な例を提示している。

(29) For instance, *nod* does not express verbal communication, but nonverbal communication only, and, as predicted, it is incompatible with a *that* complement, ...

(Rudanko (1984:153))

(30) *He *noded* that I should leave.

(Rudanko (1984:153))

しかし、拙論(1997)や住吉(1999)が指摘するように、極めて稀ではあるが、*nod*は*that*節を従える。

(31) a. In the elevator Eddie gave an apologetic look. Judd met his eyes and nodded that he understood.

(Sidney Sheldon, *The Naked Face*, Pan Books, p.32)

b. I indicated a chair and she nodded that it was OK for me to sit down.

(BNC HTL 1589, 住吉(1999:191))

c. The star-gazers nod approvingly that he has struck a blow against directorial arrogance, ...

<Cobuild *Direct*, times/T0000010992>

d. Martin ... nodded that the Queen was due to appear.

<Cobuild *Direct*, scbooks/B0000000915>

e. But he nodded his head that it was true.

(Ernest Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*, Scribner Paperback Fiction, p.252)

動作表現構文は、Levin and Rapoport (1988)が言うように生産的で、*nod*の後に出る名詞だけでも、(32)に列挙したようなものなどが可能である。

(32) agreement, approval, assent, thanks, appreciation, acknowledgement, satisfaction, comprehension, goodbye, encouragement, yes, support, acquiescence, understanding, confirmation, farewell, affirmative, acceptance, greeting, insistence, sympathy

また、動詞の方でも(33)にThe Bank of Englishからの例を挙げたように、かなり珍しい動詞でも*message*にあたる名詞をとる。

(33) The doorman beamed a welcome.

Owen frowned a warning. She's only just discovered the telephone anyway, just gawks hullo into it. Angus glared his frustration. Behind them, Young Islam - dressed in sharp suits and expensive silk ties - glowered their disapproval. She shook her head, grimaced her disapproval. Ryle grinned his sympathy. Fogelman scowled his displeasure. I smirked my thanks. Marc snorted derision. Cole blinked his surprise. I clap the applause of a paranoiac. The driver shrugged acceptance. The wolfhound turned, wagged a cursory greeting to her.

nod以外の非言語伝達動詞がthat節を従える例をThe Bank of Englishから(34)に挙げる。

- (34) a. He shakes his head that Craig Mcdermott can exude such ferocity on the field while doting so gently over his children after hours.
<Corpus oznews/OZ. Text<tref id=NA---950930>
- b. the deaf old Maquis fighter in his beret, who chortled and smirked that of course there were mistakes, but it all had to be done.
<Corpus times/UK. Text <tref id=NB 1 --990523>

- c. They shrug their shoulders it's somebody else's car isn't it.
<Corpus brspok/UK. Text <tref id=SB 1 ---0670>
- d. He winked it might be a little quieter back in Siberia."
<Corpus usbooks/US. Text <tref id=BU-----491>

動作表現構文で使われる代表的な動詞nodの補部の拡張の様子を主に見てきた。

文法項目配列順序について言えば、(23)の次に(22)、(33)、その後、(28)、(31)、(34)である。

2.4. One's Way構文

(35) を見てみる。

(35) Bill belched his way out of the restaurant. (Jackendoff (1990:211))

いきなり、(35)を見れば、奇妙な文だということになる。belchは自動詞であり、通常、目的語を認可しないし、方向句も認可しないからである。しかし、(35)は文法的である。では、文法の拡張という観点からみたら、どういうことになるだろうか。文法はminimal stepで拡張していくと考えると、文字通りの意味の時に内項としてwayを認可できる、makeとfindという動詞から話を始めるのがよい。makeもfindも他動詞で、意味的にも「道を作る」「道を見つける」と言えるので、単純な合成により、(36)は生成される。

(36) a. I made [_{NP} her way [_{PP} to the top]].

b. I found [NP her way [PP to the top]].

もちろん、自分自身の道を造ったり、自分自身の道を見つけることもあるので、(37)も単純な合成で生成される。

(37) a. I made [NP my way [PP to the top]].

b. I found [NP my way [PP to the top]].

同じく単純な合成で生成される(36)と(37)だが、両者の間には、決定的な違いがある。(36)のように、他人の道を造ったり、他人の道を見つけても、自分がその道を進む、という解釈は生じない。その解釈は、前節でも見た、Huddleston (1984:37)の語用論的な含意からは生じない。しかし、(37)のように自分が自分自身の道を造ったり、自分が自分自身の道を見出した時には、自分がその道を進む、という解釈が語用論的な含意によって生じる。そして、自分自身の道を造ったり、自分自身の道を見出したりにするには、通常、困難が伴う。したがって、その意味が今述べた語用論的な含意によって生じた意味に加わり、「困難がありながらも自分自身の道を進むという」イディオム解釈が生まれる。しかしながら、この派生的なイディオム解釈には(37)の構造は、合っていない。形と意味のミスマッチが起きていることになる。よって、言語習得の次の段階で、この派生的な意味に合うように構造の組み換えが起こり、NPの中からPPがその外に出て(38)に示された辞書に登録すべき句イディオムが生成される。

(38) a. I made [NP my way] [PP to the top].

b. I found [NP my way] [PP to the top].

minimal stepで文法が拡張すると考えると、次に問題とすべきは、文字通りの意味の時に、wayという内項は認可しないが、(39)に示すように、方向句は認可できるjumpのような動詞である。

(39) Miss Marple jumped into the room.

(39)の方向句into the roomはJackendoffのシステムではPathという概念範疇に属し、(40)のように表記される。

(40) [Path TO [Place IN [Thing ROOM]]]

影山・由本(1997)は、JackendoffのPathという概念は、SOURCE, GOAL, PATHを含み込む非常に広い概念で、日本語の移動表現を適切に扱うことが出来ないと言う。彼等の主張を受け入れるなら、(40)はGOALで方向の終点ということになり、(39)には彼等の言う意味でのPath of Motionが形の上では存在しない。Levin and Rappaport Hovav (1995)によると、(39)のjumpのような移動様態動詞が方向句をとった時は、もとの移動様態から方向付けられた移動へと意味推移が起きる。方向付けられた移動からは、移動経路が強く含意されるから、(39)には、形の上では移動経路はないが、意味上はそれが強く含意されることになる。ここにある種の形と意味のミスマッチが生じる。そこで、言語習得の次の段階で、先程習得したwayが目的語位置に具現化している(38)を手本にして、jumpのような移動様態動詞が用いられたOne's Way構文(41)が生成される。

(41) Miss Marple jumped her way into the room.

(41) が可能になった段階を考えると、(41)に含まれるwayは、高見・久野(2002)も言うように内在的に長さを持っている。したがって、(41)のjumpのようなactivityを示す動詞の後の目的語位置に起きると、それは、Tenny(1987)のいうmeasure outer, delimiterとしての機能を果たす。(41)が可能になった段階で、make, findといった他動詞に加え、jumpのような外的な移動を示す、多くの自動詞もOne's Wayに起きるという知識が既に獲得されている。加えて、wayという移動経路が明示化されていることにより、その部分で移動ということは保障されている。そうすると、次の段階としては、もうjump-typeを生成するにあずかったシステムは、飛ばして(bypassして)、measure outer, delimiterのwayと矛盾しないという条件下で、目に見える外的な移動ではない、体の中での内的な移動を示すようなbelchや他の動詞が生起可能になると考えられる。こうして生成されたのが、最初に見た(35)である。このようなステップをいくつか踏む文法拡張に沿って見ていけば、(35)も英語で認可されうるのも納得がいく。

(35)まで可能となった段階では、多くの動詞がOne's Way構文で使われるという言語知識が獲得されたわけだから、動詞の部分と比較的自由に入れ替えることが可能であるという知識を運用の時に意識して、いわば、この構文をもじって使い出すのではないかと考えられる。Kirchner(1957)が指摘した意識使用がこれにあたる。

(42) a. Once a year, the leaders # the politicians who have kicked, clawed, fought, cajoled # and persuaded their way to the top # meet officials.

<Corpus oznews/01. Text <tref id=N5000951121>

b. Their final duet from Pique Dame went down so well that they turned # themselves into shepherdesses for the encore, mopping and mowing their way # through the opera's little Mozartian pastorale, and then repeating it all over again.

<Corpus times/10. Text <tref id=N2000960304>

c. An impressive cast including Susan Sarandon and Meat loaf vamp and camp their way through The Time Warp and other such OTT delights, whilst Tim Curry invites you up to see what's on the slab.

<Corpus ukephem/02. Text <tref id=E0000001915>

d. McWhinney, after going nine-under at 14, dropped # a shot at the par-three 15th and parred his way home.

<Corpus oznews/01. Text <tref id=N5000951127>

e. If you boo hooded your way through the film The Bodyguard there's more to come.

<Corpus ukmags/03. Text <tref

(42a) は5つの動詞が等位接続され、(42b) は動詞が頭韻、(42c) は脚韻、(42d) は専門用語、(42e) は擬声語が用いられている。

One's Way 構文が、単純合成から句イディオムさらに構文イディオムへと進んでいくことを見た。

文法項目の配列順序に関していえば、(36)、(37)、(39)の次に(38)、その次に(41)、その次に(35)、最後に、(42)である。

3. 結語

4つの構文を取り上げ、その構文がどのようにして可能になるのかを考えた。また各構文の基本形からその変種を、更に、その変種から更なる変種を生じさせる法則を見て来た。例えば、語用論的な含意によって意味を拡張するメカニズム、形と意味のミスマッチが生じたときにそのミスマッチを次の言語習得の段階で取り除き、構造の組み換えを行うメカニズム、意味が有るが形が無いという形で、形と意味のミスマッチが生じた時に、次の習得段階で、その形を顕在化させることで、そのミスマッチを取り除くメカニズム、有標な構造が生じた時に、次の段階でそれを無標な形式に戻そうとするメカニズム、前段階の拡張を経ずに飛ばして(bypassして)、自前の構造として分布を拡張するメカニズムなどである。構文は異なっても、その背後には、共通して働いている文法拡張の法則があることが分かった。しかも、その法則は、言語習得のある段階のある文法がある規則群を含んでいて、その規則群のあるものが、ある一

定の条件を充足したならば、その次の習得段階で、ある一定の別の種類の規則群が可能になると言う形で述べるができる。このような法則は、結局のところ、ある文法のある段階でどのような種類の規則が既に習得されている時に、初めてその文法の次の習得段階でどのような規則が習得可能になりうるのかの規定をしていることになる。つまり、(43)のように表せる規定である。

(43) If the grammar of a language L at stage i , $G(L, i)$, has property P, then the grammar of the language at the next stage, $G(L, i+1)$, may have property P'. (Kajita (2002:161))

これまでの文法理論はどれも大人の文法の特徴だけを見て、結局のところ、「大人の文法としてどのような文法が可能であるか」を規定していたのに対し、(43)は、言語習得のある段階の文法にとって、「次の段階の文法としてどんな文法が可能か」を規定していることになる。「可能な文法」の類を絞り込むのに、「大人の可能な文法」の類を絞り込むのではなくて、ある言語の習得段階の「次の段階で可能な文法」の類を絞り込んでいることになる。

さて、言語習得の途上にある子供の立場に立ってみると、「可能な大人の文法とは何か」はどうでもよく、「習得の次の段階の可能な文法」が狭く絞り込まれていることの方が重要である。それが狭く絞り込まれていてさえすれば、次の習得ステップに容易に進むことができ言語習得はすんなりと進むはずである。動的文法理論は(43)型の

法則をなるべく豊富にUGにもうけることで「可能な文法」の類を狭く絞り込もうと試みる。

したがって、この文法理論の立場に立つと、ある習得段階の文法が次の習得段階でどのように拡張されるのか、何が既に可能な時に、何が次に可能になりうるのか、という法則を明らかにしていくことが、言語理論の第一義的な課題である「可能な文法」の類の絞り込みに直接貢献することになる。よって、各構文を分析し、その背後に潜む基本形から変種へ拡張させている法則を抽出することは、この課題に直接貢献することになる。

(43)は、「可能な文法」の類を狭く絞り込むという言語理論の第一義的課題を果たすために立てられたものであるが、それは、同時にまた、文法理論の中である種の有標性を規定していることになる。即ち、(43)に従えば、P'がPより、より有標ということになる。(43)のこの有標性の規定こそが、「基本的な事項から高度な事項へ」という文法事項の配列順序の決定にあずかる原則に含まれる「基本的な事項」と「高度な事項」を明らかにすることにつながる。(43)があるからこそ、言語理論の第一義的課題を追求することが、同時に、「基本的な事項から高度な事項へ」という文法事項の配列順序の決定にあずかる原則に客観性を与えるという形での貢献となる。したがって、英語の各構文が何故可能になっているのか、基本形からどのようにして変種が生じるのかを考えることで、(43)型の法則を発見することは、言語理論の第一義的な課題に貢献すると同時に、何が何よりもより有標かを明らかにすることにも貢献する。この有標

性を明らかにすることは、上で述べた文法事項の配列順序の決定にあずかる原則に含まれる、「基本的な事項」とか、「高度な事項」といった概念に、言語学から客観性を与えることになる。(43)型の法則は、言語の核から周辺まで連続的に働いている。したがって、英語の細部の言語事実もおろさかにはせずにしっかりと見ていくことがこの法則の発見にもつながる。英語の事実を細部迄みること、これまで英語学が新しい言語事実を発見し、それを記述し説明することで英語教育に貢献して来たという構図を今後も変わらずとれることを意味する。また、この法則を発見することに努めることは言語理論の第一義的な課題を追求しつつ、それが文法事項の配列順序の決定を行う際の一つの基準を提供するという形で直接的に英文法教育への貢献につながることになるのである。

注

1. 本稿は、日本英語学会第22回大会(2004年11月14日、獨協大学)に於いて、米山三明氏(成蹊大学)、大庭幸男氏(大阪大学)、中村捷氏(東北大学)と筆者で行ったシンポジウム「構文・語彙の意味と構造について 英文法教育に生かす方途を探る」に於いて第一発表者として本稿と同一の題目で研究発表した原稿に、若干の加筆、修正を施したものである。シンポジウムを共に行った上記3名の方々と、大会運営委員として御尽力いただいた岡田伸夫氏(大阪大学)と、私の研究発表に関して貴重な質問とコメントを下さった、八木克正(関西学院大学)、瀬田幸人(岡山大学)、由本陽子(大阪大学)、澤田茂保(金沢大学)の諸氏に、この場を借りて感謝申し上げる。また、本稿の前段階の原稿を丁寧に読んで下さり、表現、文体上の

御助言を下された小栗友一先生と、本稿の草稿段階に於ける口頭発表に関して貴重なコメントを下されたLEXIGRAMのメンバーにも感謝申し上げます。

参考文献

- Bolinger, D. (1972) *That's That*, The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, New York : Praeger.
- Grimshaw, J. (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry* 10, 279-326.
- Grimshaw, J. (1981) "Form, Function, and the Language Acquisition Device," *The Logical Problem of Language Acquisition*, ed. by C.L. Baker and J. McCarthy, Cambridge: MIT Press.
- Horita, Y. (1996) "English Cognate Object Constructions and Their Transitivity," *English Linguistics* 13, 221-247.
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, Cambridge: MIT Press.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』東京 : 研究社.
- 梶田 優 (1982-4) 「英語教育と今後の生成文法」『学校新聞』837.2-5, 841.2-6, 846.2-6, 850.2-7, 853.2-7, 857.2-6.
- Kajita, M. (2002) "A Dynamic Approach to Linguistic Variations," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Y. Kato, 161-168, Sophia University.
- Kirchner, G. (1951) "A Special Case of the Object of Result," *English Studies* 32, 153-159.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge: MIT Press.
- Levin, B. and T. R. Rapoport (1988) "Lexical Subordination," *CLS* 24, 257-289.
- 岡田伸夫 (1985) 『副詞と挿入文』東京 : 大修館.
- Omuro, T. (1997) "Semantic Extension: The Case of Nonverbal Communication Verbs in English," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by M. Ukaji et al, 806-825, Tokyo: Taishukan.
- Rudanko, J. (1984) "On Some Constraints between Infinitival and That Complement Clauses in English," *English Studies* 65, 141-161.
- 住吉 誠 (1999) 「動詞の意味的特徴とthat節 nod +that節を中心に」『英語語法文法研究』6, 183-197.
- 高見 健一・久野 暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京 : 研究社.
- Tenny, C. (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Doctoral dissertation, MIT.
- 渡辺 良彦 (1989) 「文脈素性の拡張」『英語教育』5月号, 73-75, 6月号, 65-67.